

る。ダントンは革命を救ふための至上の方法として大膽不敵を要求する。革命議會の斷頭臺もヴァンデの溺死も、車裂きの刑も、何物もこの革命家等がその革命的方法を取ることを止めることは出来ない。そしてしかも、この雄大なドラマに伴ふものは、思想の臆病、一切のものの上に天翔ける思想に大膽のないことであつた。思想の臆病なことは、高貴なる努力をも非常なる情熱をも、無邊の熱誠をも、一切殺してしまふものである。

八月十日近くなつて王室が倒れかかつた時、ダントンやロベスピエールやコルドリエの輩は、彼等が王を恐れたよりも以上に共和政治を恐れた。そしてテユイルリイ宮殿の奥から呼び寄せられ指揮されてゐた外國軍の侵入によつて、始めて彼等は、フランスは王冠を戴いた操り人形がなくなつても濟むといふことを考へるやうになつたのだ。

坊主共が新制度に對するその廣大な陰謀によつて全フランスを蔽ふてゐた時、そしてこの陰謀がフランスの三分の二をその掌中に握つてゐた時、革命家等は恭々しく教會を取り圍んで、それを革命の保護の下に置き、そして舊教を侮辱する『無政府主義者』等を斷頭臺に上ぼせた。

經濟問題では、彼等の臆病はもつともつと大きく、そしてもつと醜劣なものだつた。封建制度はもう事實上存在しない。領主は百姓共に逐はれて國外に走つた。領主の森は荒されて、その鳥獸は退治された。封建の課税はもう拂はない。然るに革命の指導者等は國民議會の時まで封建制度の最後の遺物を保存して、それを次ぎの世紀にまで残さうと努めた。そして、名聲嚇々たるジロンド黨の徒や謹嚴なロベスピエールは、財産の平等などといふ言葉を聞くと、民衆がもう私有財産を尊敬しないのかといふ考へだけで慄えてゐた。何故なら、彼等はそれを過去から傳へて來た。國家はこの私有財産の上に基づくものだからである。

實際彼等指導者はこれ等のあらゆる點に於て遅れてゐた。そして民衆は彼等よりも過去からの解放に進んでゐて彼等よりももつと遠くを見てゐた。が、この將來の幻が實に漠然とした曖昧なふらふらしたものだつたのだ。そして民衆それ自身の中にも、この曖昧と愚圖々々々が革命全體に傳はつて、その思想がいろいろと分れてゐた。六月二十日に民衆をテユイルリイ宮殿に走らした肉屋のレジヤンドルも、王を廢するといふことは夢にも考へなかつた。王はその槍の下に押へてゐる民衆が皆なさうであるやうに、更にその槍の先きを打ちこんで王權をおしまひにしてしまふことが出來なかつた。そしてその後、バブウフの共産的陰謀が起つた時には、

山岳黨ですらもびつくり仰天してしまつた。彼等は民衆の漠然とした社會主義的平等の憧憬をよく知つてゐた。しかし彼等はそれがはつきりした綱領になつて現はれると、びつくりしてしまつたのだ。

一八四八年でも同じことだ。それまでの十五年間のあらゆる社會主義的宣傳の後に、フウリエヤカベの後に、共產主義について幾千の演説會で話され、また幾多の小冊子で説かれた後に——生存の権利とかいふことが既にそれ等のものの中に論ぜられてゐた——これら一切の宣傳の後に『民主的』革命家等は、即ち自ら革命家であると信じ、また世間でもそれで通り、彼等の間の最も進歩したものとするはれてゐた者等が、共產主義を主張するものは總て銃殺しようとした。彼等が思ひ切つて考へてゐることは漸く民主的共和制であつたのだ。國家が保護金を下付する組合であつたのだ。そして彼等は、ボナパルトの輩に、自ら王位に就くべく民衆の漠然とした共產的憧憬を利用させたのだ。

一八七一年のパリ・コムユンの時にでも、やはり同じことだ。彼等が闘はなければならぬ

反動の恐るべき力の前にはその膝を曲げない猛烈な革命家たちも、革命思想は持たなかつた。革命については、彼等はただその方法しか知らなかつた。しかもその方法といふのも、彼等によれば、政府が今日までのその敵に對して使つた武器を、こんどはその政府に向けるだけのことだ。

彼等は、彼等が倒した國家を小さくして再現したコムユンを夢みてゐるのだ。そして彼等は經濟的革命といふ考へがぼんやりと民衆の頭の中に出來かかつてゐる間に、經濟上の改革はその後でのことだといひながら、コムユンの政治的獨裁を建てることしか考へないのだ。

コムユンの旗印の下に労働者の大衆を集める唯一の方法は、經濟的革命を始めることだ、なるといふことは夢にも思はない。またもし一八七一年のコムユンが失敗したら、少なくともそれは、他日再びその事業を始めるだらう人々に、金持に對する貧乏人の、なまけ者に對す労働者の、民衆的革命といふ考へを傳へなければならぬ、とも考へなかつた。

何等の新しい思想も、舊い世界を革命するといふやうな何等の思想も、この人々にはなかつたのだ。その行爲に於ては實に革命的であつたこの人々も、その欲するところには實に臆病であり、そして彼等自身がそれに戦ひを宣言してゐる過去のモデルそのものの上に鍊えられてゐる。

たのだつた。

然らば今日吾々は、來らんとする革命の前目にあつて、それよりももつと進んでゐるかどうか。革命をやる大膽な思想と自發力とを持つてゐるか。

吾々が憤慨するこの過去に對して、その從順に對して、その偽善に對して、その瞞着に對して、果して吾々は、この過去をその總體に於てのみでなく、更にその毎日のあらゆる表現に於ても否認するところの、革命的思想を持つてゐるか。現在の制度の上のみでなく、更にそれ等のものの發達を導く思想そのものの上にも、斧を加へることが出来るか。

これを一言すれば、果して吾々は、吾々の行爲や方法に於けると同じく、吾々の思想に於ても革命的であるか。吾々の精力が革命的思想のために使はれてゐるだらうか。

### 三

吾々の父祖の持たなかつた思想の大膽さを今日の人々に與へたのには、いろんなことが與かつて力あつたことは確かだ。

吾々の時代の人々がそれに興かり加はつた自然科学の非常な目ざめは、思想に前例のない大膽さを與へた。きのふ出來たばかりの全科學が、吾々の父祖の夢にも思ふことの出來なかつた廣大な地平線を、吾々の前に開いた。

物質上いろんな力が一つのものとされて、動物や人間の精神生活をも含む自然現象の總體が説明され、吾々はこの自然現象の總體についてのごく大膽な考へを持つことが出来るやうになつた。宗教の批評は、深刻に、未曾有のそしてきた不可能だつた大膽さで行はれた。人間社會のいろんな制度の起原を神に歸するやうなことや、また奴隸制度を説明し永續させて行くことに使はれたいはゆる『攝理の法則』についての、神聖な迷信の一切の土臺は、科學的批評の下に打ち倒された。そしてこの批評は既に民衆の奥深くにまで浸みこんだ。

人間は自然に於けるその地位を知ることが出來た。彼自身がその制度をつくつたものでありそして彼のみが又それを造り直すことの出来ることを知つた。

一方には又、人が自然の中に見る一切のものに嘗つて結びつけてゐた不變といふ考へが、ぐらつかされ毀されて無にされてしまつた。自然の中の一切のものは變化する。絶えず變化す

る。太陽系も、遊星も、氣候も、動植物も、人種も。人間社會の諸制度がどうして不朽のものであり得よう。

何ものもそのまま繼續するものはない。一切のものは變化する。動かないやうに見える岩も大陸も、又そこに住んでゐるものも、その習俗も、その習慣も、その考へも、吾々が吾々のまはりで見るところのものは、直ちに變つて行かなければならない一時的現象に過ぎない。不動は死だ。かういつた考へに近代科學は吾々を馴らした。

が、この考へはまだほんの昨日からのことだ。アラゴは吾々と殆んど同時代の人だ。それでも、或日彼が大陸のことについて話して、それが或時には海の中から浮び出し、或時には波の底に沈んでゐたともいふと、やはり學者の一友人が彼にいつた。『するとその大陸はやはりきのこのやうにして生えるんですか。』それほどまでに、當時ではまだ、自然の不變といふ考へが人心に深く根をはつてゐたのだ。今日では、大陸の變化とかいふことはもう極く通俗な言葉の一つとなつた。

そして人は、革命は進化の主要な一部分に過ぎないものだといふことを、臆氣ながらも分り始めた。自然の中のどんな進化でも、變革なしに行はれることはないのだ。ごく緩かな變化の

時期のあとに加速度的の急激な變化の時期が来る。されば革命は、それを準備する緩かな變化やまたその後に来る急激な變化と同じやうに、進化のために必要なものである。

生命は不斷の發達だ。植物も動物も個人も社會も、同じ状態に長くゐれば、枯れて死ぬ。これが進化哲學の根本思想なのだ。そしてこの思想が、一切の變化のために必要な大膽さをどれほど勵ますであらうかは、直ぐに分ることだ。

猶この外でも、この世紀の間の人知の侵略の迅速さを見よ。またその大膽さを見よ。

『思ひ切つてやつて見ろ』といふのが近代の機械術の合言葉だ。高さ百メートルの海の入江に架けた長さ六百メートルの橋を考へて見ろ。やつて見れば、實際はフォス灣でそれが成功したやうに出来るのだ。三百メートルの塔を考へて見ろ。やつて見れば出来るのだ。スエズやパナマの海峽を掘つて見る。やれば、二つの大洋がつながるのだ。アルプス山に穴をあけて見る。やれば、中央ヨーロッパの平野を地中海の岸に結びつけるのだ。

近代機械術の歴史は、『大膽に、そしてまた大膽に！』といふダントンの言葉の一連の變遷に過ぎない。



そしてこの大膽さは既に文學や美術や戯曲や音樂にも及んだ。心が諸君にいふまゝに、大膽に話せ、書け、描け、作曲しろ。

諸君が思想を持ち知識を持ち才能を持つてゐるならば、諸君はその形式の新しさにも拘らず聽かれ、また了解されるだらう。

#### 四

これらの一切のことは、吾々の時代に、又その革命に、莫大な利益を興へる。これら一切のことは革命家の思想の大膽さを刺戟する。然るに不幸にしてこの同じ大膽さが、今日までのところ政治や社會經濟の方面に缺けてゐた。そこでは、思想に於ても、またその適用に於ても、まだ臆病が支配してゐる。

尤も、前世紀の間は、政治史は敗北のことしか書くことが出来なかつた。あちこちで勝利は得られてゐても、その勝利はやはり全く敗北の性質を持つてゐた。

一八四八年の革命前に、イタリイや、ハンガリイや、ポーランドや、アイルランドの愛國者等が、その民族的獨立を得ようとして示した壯烈な行爲を思ひ出して見ても、それが失敗に終

つたことを思へば、そこに何等の元氣づけさへも見出すことは出来ない。そして、イタリイやハンガリイの獨立が遂にどうして得られたかといふことを思ふと、その理想がそれによつて實現せられるに至つたその帝國主義に對する讓歩や、その後戻りについて、彼等愛國者のために赤面せざるを得ないのだ。

四八年六月や七一年五月の犠牲者等の殺戮や、ドイツの軍國主義や、帝國主義時代のフランスの侵略や、ロシアの青年の無駄な努力や、ロシアの革命の失敗や、又ロシアの反動主義がその勝利を歌つた虐殺、これら一切のことは、社會事實の表面しか見ることの出来ないものには大膽な心呼び起すやうにも、また養ふやうにも出來てゐなかつた。

また、國際労働者同盟（インタナショナル）が、その最初にやつた大きな約束、労働者の心に呼び起した希望について考へて見ても、その後繼者であると自負してゐる諸労働黨の墮落を思へば（これはサンデイカリズムの勃興以前に書いたものだ）、労働者がその約束について信仰を失つて、その心に絶望を抱くやうになるのも尤もなことだ。

しかし、政治の落膽者共によつて擴げられ養はれたこの見解ほど、間違つたことはないのだ。何故なら、前世紀の失敗や敗北の原因を考へると、何にがその敗北を持ち來たしたかは、

直ぐ分るのだ。それは前に進むことを十分敢てしなかつたからだ。いつでも目を後ろの方へ向けてゐたからだ。

いろんな個人や國民が、荒れ狂ふやうな革命黨となつた時、彼等はその理想を將來の中に求めず、それを過去の中に求めた。新しい革命を夢みるかはりに昔の革命にあてがれてゐた。

一七九三年には、ローマか或は古代スパルタをさへ再建しようとして夢みてゐた。一八四八年にはこの一七九三年のやり直しをしようとした。一八七一年にも、一七九三年のジャコピン黨をひそかに崇めてゐた。ドイツ革命もやはりこの一八四八年を再現しようとした。一八四八年にはペテルスブルグの執行委員會はブランキイやバルベスをそのお手本とした。そして一九〇五年には、ロシアの社會主義革命家は、ロシアの新聞でいつも一つの革命として彼等に教へられてゐたところの、ベルリンの一八四八年三月十八日を想像してゐた。

技師や科學者や藝術家が過去を投げ捨ててゐる時、政治家と經濟學者とはその靈感を過去に求めてゐる。實際、もし技師がその材料を古代技術に求めるとしたなら、その技術はどんなも

のになるだらうか。その新しい考へを得るのに、その手許にある新しい材料を使はなかつたらローマの橋や堀割以上のものが出来たらうか。フォルス橋の技師等は、この新しい材料を使はなかつたら、海の入江を遮つて橋弧を積み重ねるのにシクロペアンの技術しか考へることが出来なかつたらう。もし彼等に大膽さがなかつたら、彼等はその建築の新時代を開くことは出来なかつたらう。

又 もしウォレスやダアキンが古い書物の中に事實と思想とを探すことに固執してゐたとしたら、植物や動物の進化といふ學問はどんなになつたらうか。この先驅者等は新しい學問には新しい觀察が要るといふことが分つてゐた。そして彼等は大自然を訪ねて、熱帯のほとりにその秘密を探りに行つた。その新しい歸納的結論を得るために新しい基礎を求めに行つた。

然るに、政治や經濟の方面ではかういふことがないのだ。そしてこれがその考への臆病なわけなのだ。十九世紀の一揆叛亂の敗北したわけなのだ。

その目を後ろの方へ見はつて新しい社會を建設するなどといふことが出来るものでない。ブルードンが既に勸告していつたやうに、今日の社會の傾向を研究して、それによつて明日の社會を推斷するほかは、新しい社會の建設に達することは出来ない。人心に芽ぐんでゐる新しい